モデル事業実施報告（中津市今津公民館）
＜「協育」講演会についての報告書 ＞

学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる『協育』講演会

今津公民館では、今津小・中学校と地域で連携して、「学校・家庭・地域が連携して子どもを育てる『協育』ネットワーク活動を推進する。この『協育』講演会を通して、地域ぐるみで子育てを進める機会を推進する。

１　期日・日程　平成２６年　１月１７日（金）
　　人権・道徳学習参観１３：４５～１４：３０
　　「協育」講演会　　１５：００～１７：００
２　場　所
　　今津小学校　各教室(授業)
　　多目的ホール(講演)
３　『協育』講演会
　　講師：今西 光昭 氏（愛媛県新居浜市「泉川まちづくり協議会」事務局長）
　　演題：「地域と共に育つ子どもたち」
４　参加者　７０名

【講演内容】

１　泉川校区の現状

新居浜市は、人口は１２万５千人、平成の大合併では別子山村と合併した。泉川校区は、市の中央部にある人口１１，６００人の商業・住宅地域である。小中学校は、もちあがりで、地域の一体感が強い町である。地域のキャッチフレーズは、「自分達のまちは、自分達の力で」であり、行政に依存するのではなく、自立したまちづくりに取組んでいる。そのきっかけは、学校支援地域本部、放課後子ども教室など様々な事業に積極的に取組んできたことが挙げられる。

地域は、国道１１号線バイパスにより分断されており、国道の中央緑地が荒れ放題だったが、今は、国土交通省とアダプトプログラムを締結し、みんなで美しいまちづくりのシンボルとして活動を進めている。これらの活動にみんなが協力することで、地域の力が強まり、新しいまちづくりができていることを実感している。

２　今年度の新しい取組みの紹介

（１）読み聞かせ教室

写真は、小学校低学年を対象にした読み聞かせ教室である。泉川地域の住民は、汗をかいて作業するのは得意だが、勉強を教えたり、子どもに話したりするのは苦手であった。今年度から、その壁を破ろうと、仲間を募って始めたのが読み聞かせ

である。実施にあたっては、学校の先生の話の中に、子どもの落ち着きがないという話があったのが引き金になった。昨年の６年生にはその傾向が強く、授業中に教室を出ていく子どももいた。地域の人の目が注がれることで、子どもたちは変わるに違いないという思いがこの活動に繋がったのである。読み聞かせを通じて、子どもと直接交流できた。また、これまでは学校の敷居は高かったのだが、毎週金曜日の朝一番の時間、この教室でという決めごとがあれば、気軽に学校に行けるようになった。いつでも来て下さいよりも、ノルマがある方が行きやすいのである。また、ボランティアとして関わってくれる人にとって、この読み聞かせ活動は新鮮であり、未体験の挑戦であった。事業実施前には、図書館司書の方に教室を開いていただき、どう読んだらいいのか基本から学んだ。その後も、何を読んだらいいのか、図書館に通って相談している。まさに、子どもの笑顔、そして真剣なまなざしが、落ち着いた学びの環境を生み出し、大人にも生きがいと自己実現をもたらした。

（２）泉川小・中学校連絡会

毎月一度、公民館に小・中学校の先生、ＰＴＡ、地域の団体代表が集まり、学校の状況、良い点・悪い点を出し合う会を実施している。学校支援地域本部事業にとって最も重要な要素は、情報共有である。これまで、情報不足ゆえに不信感が生まれ、関係がぎくしゃくしたことが度々あった。学校支援を始める前には、学校から提供される情報はきれいごとばかりであった。「なんの問題もありません」といわれていたにもかかわらず、気づいてみると学校が荒れていた、そんな経験がむしろ学校支援地域本部を生み出したのだが、事が起こった時に対症療法として会を持つのではなく、未然に小さな芽のうちに問題を摘み取る会の必要性を感じたのである。

連絡会のポイントは次の三点である。

①学校側から生の子ども達の状況を伝えること

個人情報に関連することには配慮が必要であるが、原則、隠し事をしないようにする。その代わり、参加者は決して他言してはならない。

②地域にできることは積極的に関わるムードが高まったこと

連絡会を通じて住民の意識が変わった。今まで学校は治外法権、地域の人は立ち入らない方がいいという思いが強かったのだが、自分達にもできることはある、という気持ちが生まれ、頼りにされているんだという気持ちが次の行動を呼び起こすようになった。

③“遠慮”と“押し売り”の交通整理ができること

学校や地域にとって良いことが出し合えることで、これまでは遠慮したり、押し売りになっていたことがきちんと整理できるようになった。お互いにとって良き関

係をつくるために守るべき節度を身に付ける連絡会になってきた。毎月一回のこの会を積み重ねていくことで、学校と地域の溝は埋まる。

小・中学校連絡会は当初は中学校と地域の情報交換からスタートした。しかし、泉川地域の場合、小学生６年生は原則すべて同じ中学校に通う。中学校になって荒れる原因は、小学生の時に既にあるため、両者が繋がらなければ意味がないということで、小学校も参加するようになった。このことは、中１ギャップの緩和にも役立っている。小、中学校の先生が意見交換することで、子どもの安心にも繋がっている。また、年一度の教育委員会との情報共有の場である教育懇談会では「熟議」形式を採用した話し合いを行っている。できるだけ多くの保護者、地域の人が、子どものことを真剣に考える場になっている。

（３）小・中学生を地域活動の担い手とする取組

これまで、学校を通じて、子どもに声をかけてもらい、参加協力を仰ぐことはあったが、それは一方的なものであり、子どもの意思が反映したものではなかった。子どもの考え、意志を尊重し、お客さんではなく、当事者意識をもって、地域の一員として役割を果たす取組を検討した。

＜取組みのポイント＞

活動で大切なことは、学校の先生に言われて仕方なく参加するのではなく、子どもが選んで取り組めるようにすることが大事である。子どもが地域の中で頑張っているということを住民に知ってもらうこと、さらには、希薄になっている子どもたちの先輩・後輩のタテ関係を復活すること、上級生が下級生の面倒を見ることが当たり前になる関係を呼びもどすことにつながる。その結果として、子どもが多く地域活動に参加してくれ、活動そのものがにぎやかになり、日常、道路で顔を合わせてもあいさつが交わされる関係になってきた。

歳末の助け合い運動では、社会福祉協議会や自治会のメンバーと一緒に中学生、小学生が独居老人のお宅を訪問し、赤飯と手紙を手渡す。お年寄りから「ありがとう」と言われ、興奮しながら公民館でその体験を語っていた小学生の顔を今も思い出される。写真は、国道バイパスの草抜きであり、地域のシンボルロードの美化に子どもの力は欠かせない。そして、この秋からは、バイパスの花壇を中学校の子どもで管理する名乗りを上げてくれた。子どもは本当に色々な場面で頑張っている。私たち大人は、この子どものがんばりに応えていかなければならない。

３　泉川校区での学校支援地域本部事業に取組むきっかけ

学校支援地域本部事業に取り組むきっかけは、７年前に泉川中学校がかなり荒れた状態になった時期があり、学校の中で、生徒達が暴れ、先生だけではコントロールできない状態に陥ったのである。何とかして、荒れた学校の状態を、正常な状態に戻したい。子どもの心を落ち着かせ、乱れを無くしたいという思いが働いたのである。そのために、それまでは弱かった学校と地域の関係性を高めたいと考えた。地域には、学校や子どものことを真剣に考え、何とかしたいという思いを持った人

がたくさんいる。そんな人を掘り起こし、活躍してもらう、そうすれば、結果的に学校の先生も、荒れた学校への対応に時間を割くことなく、本来の教育に専念できるのではないかと考えた。そして、公民館としては、学校を支援することで地域の底力を強化したいと考えたのである。

活動の始まりは、子どもの安全確保と学校環境の整備からであり、平成１７年の２月に、新居浜市のある中学校で不審者の侵入事件があり、その頃、全国的にも不審者事件が続発していたこともあり、公民館が中心になって全市に見守り隊ができた。泉川校区でも１００人ほどが登録し、登下校時の見守りを今も続けている。もう一つは、地域の様々な人が協力して、学校の環境を整えるために力を貸してくれていたことである。溶接をやっていた人やスレート屋さんが協力して、老朽化した小学校のウサギ小屋を建て替えてくれた。こんな活動が、素地として出来上がっていたことが、文部科学省の学校支援地域本部事業にスムーズに導いてくれたのである。

実際に、学校支援がスタートすると新しい取り組みにチャレンジしようということで、いくつかの新企画が生まれた。写真は、中学生と自治会が合同で実施した中学校での地域防災訓練である。新居浜市は、平成１６年に数度の風水害に遭い、甚大な被害を受けた。災害時に中学生の果たす役割も知った。ここでは、消防団が指導し、中学生も大人も一緒に、もしもの際の対応を学んだ。

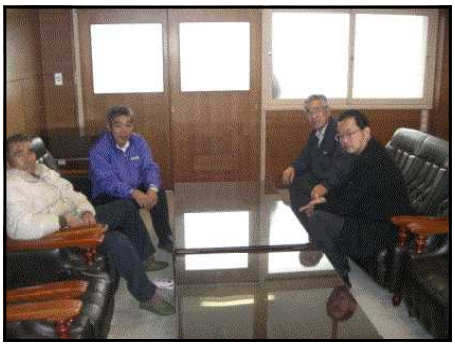
写真は、中学校での学校環境の美化大作戦である。荒れた中学校を何とか立て直すのが活動の発端である。地域に何ができるかと考えたときに出た答えが、まずは学校の環境を美しくしようという話になった。正門を入るとうっそうとした木々、ごみも落ちている、雑草は生え放題。これは教育の環境じゃないという話になり、みんなで協力して、ぴかぴかの学校にしようということになった。心を正すには、まずは形を整えなければという思いであった。

寒い１２月の日曜日に実施したが、地域の有志１００人ほどが中学校に集合した。 その作業はまさに想像を越えたもので、地域には様々な職種の人たちがいる。建設業を営む人はレッカー車を持ってくる。道路作業の人はパッカー車で剪定した樹木を片づける。造園業者は、高い木に登り枝を落とす。正門をペンキで塗り替える人もいた。その結果、中学校の正門周辺は見違えるような環境に生まれ変わったのである。作業には、学校の先生も中学生も協力した。中学生は一部のクラブ活動だったようであったが、一緒に汗を流してくれたことは大きな意味をもつ。これまでは、ほとんど

繋がりがなかった先生と地域が一気に近づいた。子どもにとっても、自分たちの力できれいになった学校を見て、清掃にいそしむようになった。その後、今に至るまで、学校の環境は美しく保たれている。

この活動を通じて、学校の先生方の気持ちに大きな変化が生まれた。おそらく、やる前は何ができるものか、きっとお茶を濁す掃除だろうと思っていただろう。しかし、いざやってみると色んな機材が持ち込まれ、予想をはるかに上回る人が集まり、全く別の学校に生まれ変わった。そして、その後は、地域に任せば何とかしてくれる。大丈夫だという信頼感が生まれたのである。この変化は、大きかった。この環境美化活動はまさに、泉川のターニングポイントになった。しかし、未だにすべてが変わったとは思っていない。先生の中には、きっと大きなお世話と思っている人もいるかもしれない。しかし、それはきっと今後の活動の継続で意識の変容が起こるはずと信じている。

４　泉川校区での学校支援地域本部事業の発展



学校側の意識の変化は、学校支援地域本部事業を発展させた。しかし、それを一過性のものにしないために大きな役割を果たしたのがコーディネーターであった。正式なコーディネーターは４名だが、コーディネーターを支える取り巻きも多く存在する。校区内には、ポケットパークや道路の花壇などいっぱいある。そこでは、日常的に地域の人が作業している。子どもには、背中で教える教育が必要である。学校の先生にも同様だ。そんな積み重ねが地域の風土を変えていく。また、私も足しげく校長室を訪ねた。また、校長や教頭も度々公民館を訪ねて来てる。そんな関係性こそ地域の財産ではないだろうか。

学校支援地域本部事業を継続していくと地域が変わってくるんですね。まずは、学校を見るまなざしがやさしくなってきた。それまでは、「学校しっかりしろ。」という感覚で眺めていたのが、他人事ではなくなってきた。学校をみんなで支えようという当事者意識ができた。子どもの挨拶やボランティア活動に対して注目するようになり、学校に行くことが楽しくなってきた。また、自分の目で学校、子どもの実像を見ることができるようになり、噂に流されたり、固定観念で見ることは無くなってきた。

５　泉川校区での３つの課題

（１）学校と地域には見える壁、見えない壁

学校と地域は、信頼関係の積み重ねである。学校は、未だに遮断されている。正門は閉じられており、閉じられた空間で安全確保というスタイルは残っている。むしろ、いつも地域の人の目が注がれている方が安全だが、まだその思いには程遠く、

先生の意識の壁もまだ残っている。一緒に汗をかいた先生は理解してくれても、異動してきた先生にはなかなか思いは伝わらない。先生のプライドを傷つけないように、地域との関係をつくっていくことで、壁を壊したい。地域住民も同じである。学校との関係ができた人は大丈夫であるが、つながりのない人にとっては学校は遠慮すべき場所である。だれでも、構えることなく関わっていける場所だということを啓発していくのが公民館である。

（２）地域住民が受益者の感覚から当事者意識へ変わることができるか

学校は、地域にやってもらって当たり前になってはいけない。まずは、自分たちで頑張らなくてはならない。地域は、学校に期待するだけで、あるいは傍観者として見ているだけではいけない。お互いの考え方を突き合わせ、何が子どもにとって一番良いことかを熟議する場が必要である。

（３）もっと子どもの顔が見える地域に

子どもができることは、子どもにできるように機会を提供しようということである。大人は、子どもにできることをいつの間にか奪ってしまっている。子どもは、無限の可能性をもっている。その可能性を引き出し成功体験を重ねることで、自己有用感を高める。私たち大人は、子どもと一緒に語り合い、子どもの意見に耳を傾け、やりたいことをやらせてあげる気持ちが必要である。何かやって失敗した時のことだけを考え、何もさせないのでは子どもは成長しない。いつまでも子どものままである。また、大人も子どもに触発されることが多い。地域住民も活動の節目、節目で子どもの言葉や行動に何度も励まされてきた。

６　活動の評価、成果

泉川地域のキャッチフレーズ「自分達の地域は、自分たちの力で」の精神が、学校支援によって定着してきた。言いかえれば、社会関係資本、ソーシャルキャピタルがぐんと増え、子どもから高齢者まで、世代を越えた交流が拡がり、これまで団体ごとで縦割り意識が強かったのが、一緒になってネットワークで取り組むことができた。また、子どもの意見を聞くことで、新しい発想が生まれ、前例踏襲ではない新規創造の活動が増えた。学校の課題は地域全体の課題と捉え、様々な活動が行われた結果、子どもの学校での生活が落ち着いてきた。今年の中学校の運動会は、７年前とは全く違った運動会になっていた。みんなの表情が豊かになり、全力で競技に取組み、地域住民と出会っても笑顔できちんと挨拶する。まさに、これこそが最大の成果である。

７　今後の取組

（１）子どもの学力を向上への取組

泉川の大人は勉強を教えることは、苦手であるが、特に今の小学校、中学校では

掛け算や、割り算でつまづく子どもも多いと聞く。そのレベルであれば、そこを乗り越える手伝いを地区住民でもできるはずである。学校の先生と連携を取って、学力向上支援を行っていく。

（２）中学校の生徒会と地域のまちづくり協議会の連携強化

子どもにできることを、自分達の自治組織である生徒会で議論し、その結果を地域のまちづくり協議会の活動に反映できるようにしたい。すでにバイパス花壇や子ども祭りなどできっかけはできており、今後発展させたい。

（３）学校の授業の中に、まちづくりを学ぶカリキュラムを組み込む

地域の人が、どんな思いを持って学校支援をはじめ地域づくりに取組んでいるのか、そのことを子どもに伝える場を継続的につくる。「蒔かない種は生えない」といわれるが、小学校４年生に地域の人が先生になって教えることができれば、その種まきは十年先にきっと大きな花を咲かすと信じている。

（４）泉川流の学校支援地域本部の将来に向けて

文部科学省のいうコミュニティスクールにはならないが、コミュニティの学校を目指したい。学校を地域全体で支える仕組みができれば、子どもたちはその中で経験を積み重ね、立派な大人に育つ。学校支援地域本部が充実することが目的ではなく、その中で泉川で育った子どもたちが地域に誇りをもち、わが町を愛してくれることを目的に取組んでいく。「大好き泉川」を合言葉に、子どもから高齢者までみんなで地域社会を創る活動をこれからも続けていきたい。学校支援地域本部事業は、地域の力を育む。そこで培われた人間関係、ソーシャルキャピタルを蓄積し、みんなが幸せを実感できる「ふるさと」泉川に磨きをかける。

【質疑応答】

Ｑ まちづくり協議会の具体的な内容は、

Ａ 泉川公民館は、まちづくりに取り組んでいる。以前、自治会では、行政からいわれたことを自治会長が聞いて、その問題を縦割りで解決していた。それでは、行政にいわれたとこだけやろうということで、あまり進展はなかった。自治会は、道路のことは国や県、学校は先生が面倒見るのが当たり前ということで、直接関係がなかった。それでは発展しないということで、これを様々な分野毎に課題（子どもの問題、環境美化、地域の安全・安心、防災、福祉）等の課題を、地域住民が集まって、その中で、課題を自分たちで考えて地域をよくしていこうというのが、まちづくり協議会の組織である。地域課題は、地域住民が自分たちで考えて、財源も自分たちで自前で行う取組である。自分たちができるということ、たいしたことはできないが、人材とわずかな財源で、自分たちでやろうというのが方針である。

Ａ ７年前にとても荒れていた学校が、いまでは落ち着いているが、そのなかで、まちづくり協議会がどう関わって学校が変わっていったのか

Ｑ ７年前に公民館長として赴任したときは、学校内のガラスが割れたり、廊下に石ころが転がっているなど荒れた状況であり、校長も困り果てていた。この状況を何とか打破しなければならないと始めたのがきっかけで、地域住民も巻き込んで学校支援地域本部事業を立ち上げた。マイナスからの出発であったが、今では、

学校支援地域本部事業も軌道にのり成果を上げている。その活動の中で、まちづくり協議会を発足させ、子どもの育ちを支える部会を中心に学校の中へ入っていき、こどもと一緒に祭りなどのイベントに取り組んでいる。また、環境美化部会では、学校校庭の環境美化、安全・安心部会では、中学生と一緒に防災訓練を実施するなど進めている。

A まちづくり協議会では、どういう組織をつくっているのか。

Q 組織は、５部会（安全・安心部会、地域福祉部会、環境美化部会、子どもの育ちを支える部会、健康づくり部会）構成である。地区グループサークルの部会もあるが、その人たちが５つの部会に入って、一緒に地域課題を考えるようにお願いしている。５つの部会が自分たちで考えるのに困難な場合は、公民館に設置している生涯学習部会に相談して解決を図る。例えば、地域防災で専門家の先生を講師招へいする場合は、生涯学習部会で講師を探してもらい、講演会を開催する。

A 種をまく、種をまかなければ花は咲かない、実は実らない。それが何年先になるか分からないけれどもとい思いだと感じた。地域の誇り、学校の誇りをもたせることが大事であると共感した。何かを始めたら、最低１０年続けなければ意味が無い。今津中学校では、学校が取り組んできた中で学校の誇りにつながるものの掘り起こしを前期にやってきた。後期には、新たな誇りづくりとして、英検活動や英語でのスピーチ大会を開催することで、子どもの言語活動に結びつけていく取り組みを行っている。中学校は、どれくらいの規模か、

Q 中学校は、一クラス４０名で、一学年２～３クラスである。

A 文科省のコミュニティスクールではなく、コミュニティのある地域ということで、行政に頼らないまちづくりに非常に感動した。私もこの地域の一員として頑張りたい。コミュニティスクールについてどう思うか、

Q 行政から、文科省のコミュニティスクールに申請するようにいわれるが、地域で、学校の専門的知識のある人もあまりいないし、学校の先生に直接、権限を持って何かいうことも抵抗がある。今は、学校を支える方向で進めていく。

A 子どもが輝き、地域住民と美化活動等のふれあいを通じて、最終目標は学力向上になのか、

Q 今津地区の子どもは、落ち着いていると聞いているので、次に進むべく目標は、学力向上だと思う。泉川地区も、子どもが落ち着いてきたので、次のステップは、学力向上に進みたいと思っている。しかし、具体的にどのように進めていくか２年前から地域住民と相談しているが、今一歩前に踏み出せないところがある。やはり、地域の先生をボランティアでやっていただくだけではいけない。公民館や学校で勉強を教える際に、勉強できる子どもは、集まってくれる。私たちが本当にやりたいことは、あまり勉強が好きでない子どもに集まってもらい、レベルアップする方向にしたいが、なかなか集まらない。その問題を、どのように解決したらよいのか、皆さんにも教えていただきたいと思う。

A 学力などが厳しい子どもをどう支えていくのか、

Q 子どもには気持ちとエネルギーがもたせることが大切、その気持ちを持続させること、実際に何かできることがあるのか動くことが大事である。いろいろ意見があると思うので、参加者同士がワークショップ形式で話し合いをするほうが意見

が出やすい。

【参加者の主な感想】

○　荒れた学校に、地域の方が校内や授業の見回りをすることにより、子どもが落ち着きを取り戻し、大きく変わっていった姿に地域力の必要性を感じた。
○　学校は敷居が高いが、泉川地区のように地域で協力体制を整えれば、学校に対して入りやすい雰囲気ができる。
○　子どもの学力向上について、参加者がワークショップ形式で話し合い、保護者同士で情報共有することができた。
○　参加者は、学校を変えていくためには、学校だけでなく地域住民の協力が必要不可欠だと実感していた。
○　自治会だけの活動では、地域活動に限界があり、様々な団体と連携・協力することにより活動が広がると実感した。
○　地域住民が子どもと関わる学校支援を通じて、逆に地域住民が子どもから元気や生きがいを感じている姿が伝わった。
○　地域が一体となる活動を行うためには、小中学校、公民館、自治会、地域の諸団体などとの課題解決に向けた情報交換会の必要性を感じた。
○　子どもに地域の方が関わることにより、子どもが挨拶ができるようになるなど地域全体で子育てを行っていく雰囲気が醸成できる。
○　まちづくりを通じて、地域課題を解決するだけでなく、地域全体がつながっていくように感じた。
○　地域団体の壁を乗り越えるのはエネルギーが必要だが、それ以上に、壁を乗り越えたときに素晴らしいまちづくりにつながると感じた。

【考察】

泉川地区は、「自分たちにできることは自分たちでやろう！」というのが合い言葉である。自分たちで地域のために、子どものために頑張ろうという仲間が少しづつ増え、自治意識が向上し、地域が大きく変わった。

地域の課題解決のため、公民館に「泉川まちづくり協議会」を設置し、五つの地域課題“安全安心・環境美化・地域福祉・健康づくり・子ども支援”ごとに部会を置き、ネットワーク型の組織とし、熟議を基本にした地域づくりを進めている。

地域課題解決というと目的のもと、まずはみんなで協力して活動を実践し、一緒に汗を流す中で、地域や学校は徐々に変化していった。地域の中で交わされる「ありがとう、よかったね」の小さな成功体験が積み重ねられ、徐々に地域力が育まれた。

今回の講演会では、参加者から、「自分たちの学校や地域をよくしていくためには、何が必要か」という視点で、多くの質問が出された。今津地区の住民も、泉川地区の住民と思いは同じである。今後は、この取組を参考にして、今津地区で、地域の中で、「協育」に対する連携が少しずつ増えていく活動を継続していいき、地域づくりの活動が活発になるような仕組み作りを行っていく。

【記録写真】

＜「協育」フォーラムについての報告書＞

『協育』フォーラム

本フォーラムを通して、地域ぐるみで子どもたちを地域の一員として見守り育む地域づくりの実践による成果と課題を参加者が共有することにより、今後の協働による地域づくりの拡大・充実をめざす。

１　期日・日程　平成２６年　３月１５日（土）
　　１４：４０～１６：００
２　場　所
　　小楠コミュニティセンター
３　「協育」フォーラム
　　講師：讃岐幸治 氏（愛媛大学名誉教授）
　　演題：「協育から郷育コミュニティへ」
４　参加者　１５０名

【講演内容】

１　「子育て共同体」の建設を目指して

①くじの縁による振興住宅地

讃岐氏は、３８年前に住宅供給公社の倍率十倍以上のくじにあたり、松山市内の新興住宅地に土地を購入した。そこは、市内奥地で伝統も歴史も何もない土地であった。地域は、地縁血縁が全くない。地域の集まりは、くじの縁であり、隣近所の住民がどんな仕事についているのか全く分からなかった。たまたま、近所で出会った人が、後でテレビで知ったことだが、空き巣の常習犯であった。誰もお互いに知らない。道路が汚れると自分で片付けずに、役所に電話する。まさに、我が身さえよければいいという状況であった。地域は、人のことは関係ない匿名化社会、無縁化社会であった。

②自治公民館長に就任

そのような状況で、地域に自治公民館が建設され、ふとしたきっかけで公民館長に就任することになった。これが公民館との初めての出会いであった。しかし、引き受けたものの地域をどうしたらよいか分からず、とりあえず、老人会、婦人会、ＰＴＡ、消防団などの役員を集めた。これから地域を何とかしなければならないという話をしたものの、各役員は讃岐氏と同じで、地域に住んでいることが、くじで当たったようなもので、何か事を起こすことに面倒な雰囲気があった。各自、仕事をもち、みんなが忙しいので、やりたい人にやらせればよいという雰囲気であった。そのため、肝心な話はそっちのけで、「あなたはどこ出身」という話題になり、その後は、「ふるさと」の自慢話になり、それが永遠に続き、どうしたらよいか分からない状態であった。お盆になると、ほとんどの住民が子どもを連れて実家に帰る

ため、誰も地域に残らない。

③こどもたちに「ふるさと」を　夜市の開催

この地域が、１０年後になったら、その子どもが大人になったら、どこに帰ってくればよいのか、やはり、それは、ここにしかない。子どもにとって、ここが「ふるさと」なのだ。その「ふるさと」を、地域の大人が子どもにつくってあげなければ、誰がつくるのか、子どもに、この地域を遺産として残すことが大事であると地域住民は気づいた。

では、子どもに、よい「ふるさと」をつくってあげるには、どうしたらよいのか、その仕組みこそが、子育て共同体である。子どもは、３歳までは家庭内で育てられる。しかし、３歳以上になると地域環境が人をつくる。地域で、お互いに知らない者同士で、子どもが素直に育つ訳がない。では、どうすればよいかを地域住民で考えた。その話し合いの中で、徳島県出身の人から、祭りをやって阿波踊りをしたらどうかという話題になった。祭りはよいが、松山なのに阿波踊りをするのもどうかと思った。そのあとは、地域自慢である。秋田の人は秋田音頭、長崎の人は蛇踊り、やはり、祭りは、地域住民が一体化するものである。祭りはよいアイデアであったが、中身は何をするかが問題である。その中で、夜市はどうかという話になった。今ではメジャーになったが、当時は、夜市はあまり開催されていなかった。これは、おもしろい、行けると思い、みんなが賛同した。祭りには、たこ焼き、ヨーヨー、金魚すくい、焼き肉等、みんな誰かがしてくれると思い、アイディアを出した。

多くの子どもに夜市に参加してくれるように、アイディアを出し合った。その答えは、食事を提供することである。母親の食事を作る手間も省けるし、一石二鳥である。その後は、みんなが祭りに対する夢を描き始めた。しかし、肝心な予算がない。従来であれば、予算や手段があって事業が成り立つ。今回は、ビジョンがあるが予算がない。

④夜市準備のための近所の底地

そこで、まず金魚すくいはＰＴＡにお願いした。金魚の買い付は、電話帳で調べて金魚の問屋から仕入れた。大きな水槽はなかったが、子ども用プールで代用しようというアイディアが出された。

たこ焼きは、婦人会が担当した。たこ焼き器は、専用の焼き器がないため、家庭用のたこ焼き器をいくつも並べてそろえた。だれでも特技があり持ち味がある。建築資材の販売人がいて、その人が資材を無料で提供してくれて、祭りの櫓が立った。紅白の幕は、カーテン屋が準備してくれた。地域の人は、お互いに知り合いたい、人のために役立ちたいという気持ちがある。楽しい活動でなければ人は集まらない。

提灯は、タバコ屋とさかや屋が貸してくれた。何とかしようと思ったら、地域のみんな協力してくれる。一人で悩むのではなく、みんなに相談することで課題が解決していく。子どもにキャンプをさせるとき、飯盒がなくて困ったが、相談することにより、自衛隊や警察から借りることができた。相談することで、いろんなことができる。

その後は、地域がまとまり始めた。みんなが集まって、それぞれで知恵をだしたら、力を出したらおもしろいことができる。これが、地域の教育力である。ボランティア活動も同様である。

我々は、知的便秘状態である。いろんな事を身につけるが、それを地域に出すことができていない。つまり、学習成果の還元活用ができていない。インプットのみで、便秘状態になっている。便秘が解消できて、アウトプットができると知的なお裾分けができる。知恵や経験を教え合っていくことが必要である。

２　学校支援から協育コミュニティへ

①荒れる学校　地域コミュニティの衰退・崩壊

最近は、コミュニティをつくるのが難しくなったと言われている。子どもへの支援も各団体が、ばらばらに独自に行っている。しかし、子どもの縁、つまり子縁が大事である。「子はかすがい」であり、子どものためだったら地域も協力する。子育て共同体であれば、みんな反対しない。

もう一つの考えが文化価値を高めることである。その地域に住んだら、子育て環境がよく文化価値が高くて地価が上がる。ある地区は、足の引っ張り合いをしているため文化度が低い。いじめなどの問題が多く噴出すれば、地域の文化価値が低く地価が下がる。みんなが和やかで助け合って、常に我が身と思いながら子育てをしており、お年寄りの面倒見もよい、共栄の町で輝いている、地域愛で満たされているまちであれば地価が上がる。

②地縁から子縁に　学校支援から子育て支援へ

子どもの縁は、大事である。子縁の社会を、どのようにつくるかが課題である。そのために、学校を核にしてコミュニティをつくる。今までは、学校は学校だけで、地域からかけ離れている現実がある。しかし、今は昔と違って学校自体が大変になり、地域から支えてもらわないと回らなくなってきた。学校と地域がつながっていないため、学校が悪いと保護者とのトラブルが絶えない。黒田官兵衛の家訓に、「自ら活動することによって、他を活動させることができる」というものがある。最初は、こどもが住む地域の環境や、学校の環境を整備することが大切である。学校行事では、先生一人が大勢の子どもの面倒を見ることができない。しかし、地域の人が支援することにより、子どもを支えることができる。このような活動が広がっていくことが大事である。その学校を支援する人たちが集まったら、地域の輪ができる。しかし、それは簡単なことではない。仲間内で固まるとボスができる。これをどう動かすのかが一工夫必要なところである。それには、活動を広げていかなければならない。

③キャリア教育　スーパーなどでの職場体験

例えば、ある中学校で万引きが多く発生して地域で頭を抱えていた。そこで、公民館が中心になり、地域でキャリア教育、職場体験に取り組み、生徒を万引きの多いスーパーやコンビニへ職場体験させた。当初は、スーパーの店主から「何されるか分からない」と大反対にあったが、地域と学校とで「子どもの職場体験をぜひさせてあげたい」と説得して回り何とか実施に至った。

実際にスーパーでは、職場の一員として生徒は立派に働いた。生徒も、頑張っていこうとすれば背筋が伸びる。買い物に訪れた中学生も、同級生がスーパーで働いていることで、万引きが全くなくなり、非行率がゼロとなった。

地域の方は、３千人いたら３千の人生の達人、生活の達人（折り紙、海外に詳し

い等）がおり、その人達を活用すれば、最高のまちづくりができる。特定の人間だけに教えてもらうのであれば生涯学習ではない。

④宮崎県綾町の取組　一人一品運動

大分県は、一村一品で地域興しを行ったが、宮崎県綾町では、一人一品運動を展開している。俳句、折り紙、読み聞かせ、郷土料理など、誰でも一つは得意分野があり、それに磨きをかけていこうという取り組みである。その一品について、発表の場を与える。最初は、戸惑う人もいるが、例えば「あなたは能面がすごいですね」と人に褒められてやる気が湧いてくる。まわりがその人を認め、本人の動機付けにもなる。漬け物づくりのうまい人は、地区で評判になり、それが市内全域に広がり地域の特産物になる。地域の人材バンクができる。他とは比べないで、私はこれができるということが大切であり、セールスポイント、自信につながる。野花には野花の美しさがあり、パンジーにはパンジーの美しさがあり、それぞれの良さがある。これが輝くということである。それが共同体をつくり、出番づくりにつながる。できる人がいると、周りの人が観客になり、それでは共同体にはなりえない。みんなが、一歩でも半歩でも、少しづつ関わって、「私はやれる、役に立っている」という雰囲気をつくらなかったら、まちはできない。挨拶は、心を開いて、相手に迫る。それと同様に、自分の持ち味をもち、特技を広げて、信頼関係をつくっていく。

⑤安全・安心の取組

地域の安心・安全も考えていかなければならない。子どもの安心安全な通学路の確保や、高齢者が避難するときの経路など避難訓練は大事であるが、実施方法の工夫が必要である。例えば、訓練の後に、みんなで食事をするのも楽しみが生まれ、参加する人も増え、会話も弾む。同じ釜の飯を食べることが大事である。そのときに、「元気かな、おじちゃんは」など近所の人の状況確認ができ、「だれがどこにいて、どういうことをしているか」など情報交換ができる。公民館としてはやるのは難しいかもしれないが、町内会ならやることができる。

３　地域づくりから郷育コミュニティへ

①タテ割りからヨコつなぎの組織へ　まちづくり協議会

地域全体をどうしていくのか、福祉、安全・安心、文化、子育てなど様々な問題があるが、全てが縦割りの組織である。交通安全協会では、自治会、学校、警察など関わる人で委員会をつくっている。福祉関係でも同様に横に組織をつくっている。看板が変わるだけで、似たような組織が多く、ただ出席して、意見交換する場面も少なく無駄が多い。そのような組織を一度整理して、協働の会議を組織したらよい。みんなで関われば、「何かできるのではないか」と意見が出やすい。環境づくりは、その一つの典型であり、学校、自治会、ＮＰＯ、まちづくり協議会も関れる。

②公民館が”まちづくり”の拠点

昔の公民館は、郷土振興の拠点として、地域振興の場所であった。もう一度、原点に返って、「我が地域は自分たちで何とかしよう」という機運を高めることが必

要である。行政に頼るだけでは、まちづくりはできない。住民自ら「まちづくり」に関わり、行政は、「まちづくり」以外の別のことをやるように変えていくべきである。その方法が、おもしろいのではないかということで、まちづくりが始まった。

一番最初に地域力が起きたのは、淡路である。阪神・淡路大震災の時に、地域が崩壊したが、消防や警察は応援に来ない。そこで、今住んでいる住民が何とかしなければならないということで、「あそこのお年寄りは」と声をかけ、必死に地域住民で行方不明者の捜索を行った。そのときに、地域でできることがあるのではないかと新しい公共の概念ができた。「新しい社会をつくっていこう」という機運が生まれた。そのようなことを考えれば、今起こっている環境や福祉の問題など、それぞれの過程があるが、「みんな地域で集まって、自分たちの地域で、子どもを育てるには、どうしたらよいのか」、「地域の舵取りはどうしたらよいのか」、「防災を考えるにはどうしたらよいか」、そういうことの話し合いの場をもう一度、公民館にもたせ、地域を活気づかせる方法があるのではないかと思う。そうすることを子どもに見せることによって、教育が成立する。親の背を見て子は育つ。親がいい加減であれば、子どもが育つはずはない。地域で協働しながら新しいものをつくっていこうとする姿を見せることが今一番大事であり、それが最大の教育である。

４　地域コミュニティづくり戦略

①桃太郎話にみる「まちづくり」

まちづくりは、桃太郎と同じである。桃太郎が、鬼ヶ島を攻めるときに、お供にきじ、犬、猿を連れてたが、何で、きじを連れて行ったのか考えてほしい。これは、まちづくりの３要素に結びつく。きじは、鬼ヶ島の情報収集者であり、鬼がどこに住んでいるか、どこから上陸したらよいのか、いまどういう状況にあるのかを調べるための役目を果たした。「まちづくり」において、地域の歴史や文化、産業などを、どれだけ知っているか、どういう人材がいるか、どういう施設があるか、これを知らなければ地域はつくれない。例えば、役所でＡ、Ｂの２つの事業で同じようなことをやっていれば、つながっていないということになり、地域を知らないということである。あるいは、授業中、教室に二人が机を並べて、授業が分からない状況である。「情報をどう集めるか」、「どのような人材を集めればうまくいくか」を分析する必要がある。このことは、人と人の繋がりの問題であり、ソーシャルキャピタルという。地域で、知り合っていなければ、隣のお年寄りが寝込んでいても、命が失われるような事があっても、何をしたよいかわからない。そのためは、お互いが理解できるように、努めていくことが大事であり必要である。そのための、本日の研修会がある。今までは、団体だけ、福祉は福祉だけ、防災は防災だけ、消防は消防だけ、他は関係ない。お互いに知るとことが必要である。そこには、情報を集めるだけではない。人のまねをしても意味が無い。それぞれの地域である所以、独自のものがある。どう企画・どう立案するかである。そのため、みんなが集まって知恵を出す熟議があり、ディスカッションしながら中身を深める。一方的に話をしてはいけない。それぞれの違う立場から話をすることが重要である。お互いに考えをぶつけて、同意することが非常に大事であり、このような視点が必要である。

②行動を起こすには

大切なことは、実際に行動に移らなければならない。「どれだけ人を知るか」、「」どれだけ知恵を集めるか」、「一緒にどれだけ汗をかくか」が求められる。

「汗は額にかけ」、「一人で行動するな」、「他人に任せるな」、「いいかっこするな」、「ニコニコ楽しめ」、「型にはまるな」、「決して投げるな」がキーワードである。行動を起こすには、一人でなくて二人・三人でやったほうがよい。その代わり、「他人に任せるな」、「これは、学校のこと」、「これは、行政のこと」など他人任せにしない。それをしたら、先に進まない。それが、黒田官兵衛の「自ら活動する者が、他を活動せしむ」につながる。そして、「ニコニコ楽しめ」、「型にはまるな」が大切である。基本的な型はあるが、型にはまると活動がおもしろくない。型があるから型破りができる。何も無かったら型なし。「いかに生き残るか」は、「いかに適応するか」である。そして、「決して投げるな」、こういうことが今大事になってきている。

【参加者の主な感想】

○　地域で何かイベントを行うときに、一人で頭の中で考えてしまって、出来ないと諦めていたが、様々な人とアイディアを出し合うことで、それを成し遂げることのすばらしさを学んだ。

○　地域住民で、協力的でない人も、アイディアや工夫することで、特に、楽しみを見いだす活動を行うこと人が集まることを実感した。

○　誰でも生まれた故郷には誇りがあり、それを生かす活動を地域で行えば地域に活力が生まれる。

○　公民館講座が学習するだけの知的便秘状態であると実感した。公民館講座を受講して、地域で還元活動できる仕組み作りを考えたい。

○　地域と学校が一つになり、地域全体で、子どもを育てていけるような体制が整えられたら、すばらしい子どもが育つと感じた。

○　子どもが伸び伸び育っている地域は、その地域の文化価値が高く、地域や保護者も積極的に子育てに関わっている。このような、「まちづくり」をしたい。

○　地域で様々な団体が子どもを支援する活動を行っているが、その団体が協力しあうことで、学校が盛り上がり、地域が盛り上がると感じた。

○　地域で職場体験を行うことは簡単なことではないが、地域の様々な人に関わることで、子どもは大きく育つ。

○　綾町の一人一品運動は、素晴らしい取組であり、地域住民が生き生きと活動しており、これこそが地域振興だと感じた。

○　既存のいくつもある組織の見直しを図り、ヨコの繋がりで地域のことを議論する熟議の場を設けたい。

【考察】

今回のフォーラムでは、地域において公民館を中心として、その本来の使命に立ち返り、地域づくり活動の拠点としての機能を強めていき、地域力を醸成していくことがポイントとなった。公民館での「学ぶ」機能を通して、地域課題解決への意識を高め、「結ぶ」機能を通して人びとや機関などの間のネットワークを図り、地

域の課題は自ら主体的にかつ協働して解決していこうという地域の底力を高めていくことで大切である。

公民館は、自治会など子縁、地縁を基盤とする共同体だけでなく、既存組織のタテ割り構造を見直したうえで、ＮＰＯなどのつながりを深めていく必要がある。特に今後は学校との連携協働を図っていく求められる。また、地域の担い手育成は、地域住民がそれぞれの持ち味・特技などをもち、それを生かしながら地域を創造していくことも大事である。

【記録写真】